

人間的成長につながる教育とは

— 体育を題材として —

中 川 昌 幸

はじめに

筆者は大学院時代、「学校教育における技能の習得に関する研究～ハンドボール競技を題材として～」という題目において修士論文を発表させていただいた。その内容とは筆者が行ってきたハンドボール競技をモデルとして、特に技能というものの習得について着目し、習得過程においてどのような練習をするべきか、それを指導する際にどのような事柄に気をつけるべきかといったものであった。本稿では望ましい人間形成を目指すという立場から研究を進めたのであるが、二年以上たった現在、拙稿を読み返してみると技能の習得という行為のレベルばかりが問題となっており、技能を習得する過程において被教育者（学生・生徒）にどのような人間的成長を期待するのか、そしてそのためには教育者（指導者）は何をすればよいのかという一段と踏み込んだレベルにおいての研究内容が十分とはいえない。そこで本研究においては、被教育者と教育者の関係を深める（密にする）というところに重点的に着目することにした。そのために筆者の修士論文を推敲し、特に身体運動を通しての教育である体育において、教育者がどのような視点から被教育者をとらえ、どのような態度で彼らに接さねばならないかというところを言及していきたい。

まず、第一章では研究の立場を述べ、教育の理念について考察した。第二章では本来は自発的行為であるスポーツと教育的行為である体育

とが混同されている現状を鑑みて、体育とスポーツの峻別の必要性について述べ、人間的成長を願うにはどちらの立場において被教育者に接するべきかということについて私見を述べた。第三章では技能習得過程において人間的成長を期待した教育を行うための留意点について述べた。そして、最後に本研究のまとめを行った。

第一章 研究の立場

現在、わが国では小学校、中学校、高等学校、大学といった各教育機関における運動部活動が盛んに行われている。そして、それら運動部にはそれぞれ指導者が存在する。指導者にとって、その最大の任務はその名の示す通り「指導」であるが、それは「教育」のひとつの代表的な型であり、このことが人間形成の一助たる行為たりえることは言うまでもない。

斎藤喜博は著書のなかで教育について以下のように述べている。「教育という仕事は、一人ひとりの子どもの持っている豊かな可能性を表に引きだしてやる仕事である。それは『教育』という言葉の言語が、『引き出す』ということだといわれているとおりである。（中略）したがって、教授をし指導をし訓練をするからには、そこに必ず子どもの力を引き出したという結果が生まれてこなければならない。算数のわからない子どもが、はっきりとわかったといい、算数の追求・発見の喜びを知ったといい、跳び箱のとべなかった子どもが、とべるようになった

ことを喜び、歌が歌えなかった子どもが歌えるようになるという、明確な事実が生まれてこなければならぬ。⁽¹⁾

本研究において、斎藤の言う「明確な事実」とはいったい何なのだろうか。その回答を、「人間的に成長する」という視座において追求してみたい。すなわち、人間は教育という行為を通じて人間的に成長していかななくてはならないと考えるのである。

先の斎藤の言うように算数のわからなかった子どもがはっきりわかったというといった事柄は、期待される教育的成果として本当にすばらしいものであることは言うまでもない。しかし、これはあくまでも行為（技能）のレベルであり、もう一段踏み込んだ高いレベル（人間的成長まで言及したレベル）のものとはなっていない。ではもう一段高いレベルとはどういうレベルなのだろうか。この場合でいえば算数がわかったということによってその子どもの心に、そしてもっといえばその子どもの生き方に影響を与えることのできるような教育を行うというところを意味するのである。

このことを本研究に当てはめて考える。何かひとつの技術を習得したということが契機となり、そのことがその人間の生き方にまでも影響を与えるような教育を行うということが人間的成長につながってくるのである。

このような教育を行うということは、実際には非常に困難であることは言うまでもない。なぜなら、教育の成果が非常にわかりづらいということがあげられるからである。何を以て人間的成長とするのかという定義があまりにも漠然としすぎており、はっきりとした尺度が存在しないからである。

先の事柄について次のような立場をとりたい。教育者と被教育者は、ただ立場が違っているだけであって共に学び、育つという点においては同じである。それゆえに教育者は教えているだ

けでなく、教えられている、「教育」するのではなくて共に育つ「共育」という教育論を支持したい。すなわち、教育者と被教育者は共に成長するものなのであり、教育における人間的成長とは被教育者の側においてのみ生じるものではなく教育者と被教育者の双方に生じるものなのである。この双方の関係が密になることを感じ取ることができるようになることが人間的成長なのである。

教育者、被教育者双方の関係が密になるということはどのようなことなのだろうか。例えば、今までいくら考えても理解できなかった事柄が教育者の適切な助言により理解できたとき、被教育者は感謝の念を教育者に対して持つやもしれない。被教育者がこの感謝の念を持たたとき、彼と教育者との関係が密になったといえる。これが時には理解できたということに対しての達成感であったりもするだろう。もちろんこういった場合でも達成感を媒介として教育者と被教育者の関係が密になったといえるであろう。そして、関係が密になったと両者が感じることもできたとき、それが被教育者の人間的成長となっているのである。

このように考えると教育者の責任は極めて重大である。特に教育者の人間性こそが重要となってくる。彼が豊かな人間性を育てているならば、被教育者との関係が密になりやすいということは想像に難くない。したがって、教育者は人間性を高めるためにも日々の自己研鑽が肝要である。教育者が自らの知識を増大させることももちろん重要なことではあるが、筆者は教育に対する態度が最も重要であると考え。先に述べたように被教育者と共に育つ「共育」という教師像を保持したい。このことこそが教育者の人間性の涵養につながり、ひいては被教育者との関係においてそれを密にすることを容易なものとするのである。

以上、現在の筆者の教育に対する理念を論述

した。この理念を基本として、以下の第二章では身体運動を通しての教育である体育についてスポーツと峻別を行ったうえでその立場および理念を考えていく。

第二章 体育とスポーツの峻別

人間にとって身体を動かすということは誠に大きな意味を持っている。なぜなら身体こそが人間の生活における原点であり、基盤であるからである。そして、身体があって初めて人間は人間を取り巻くさまざまな世界と相対していくことができるからである。このことは、もちろん教育についてもあてはまる。

教育において、しばしば用いられる言い回しのひとつに「知育・徳育・体育」というものがある。このように教育においてはこの三要素が最重要課題となっている。しかし、私見を述べるならば、先に指摘したように身体があって初めて人間は人間たりえると考えている。そのため、筆者の教育論においては体育こそが教育における最重要課題であるとクローズアップされてくるのである。

しかし、ここで注意しておかねばならないことがある。それは体育とスポーツは明確に峻別されるべきであるということである。現在わが国では、教育政策上の慣用語句として「体育・スポーツ」と表記されるようにこの両者が混同されて理解されている現状がある。以下に両者の立場を述べ、どちらの立場から人間形成を行うべきであるかということについて論ずる。

スポーツの立場

まず、スポーツ (sport) はヨーロッパ語「ディスポルト (disport)」が語源であるとされている。これは「運ぶこと (port)」から「離れる (dis)」という意味であり、労働から離れ

て楽しんだり、遊んだりしたいという願望のあらわれたことばである。このことを受けてスポーツは人間の自然欲求から発生した自発的行為であるとの立場をとりたい。身体を動かすという人間の第一次的欲求が生み出したものが発展し、現在の形態となったものがスポーツと考える。ここで注意してほしいことは、身体を動かす喜びは、同時に人間の持つ競争の欲求さえも喚起させることである。運動技能を高めた者どうしが競いあうようになるのは自然のなりゆきであろう。しかしながら、技能を極限まで高めた人間は、技能を高めた者どうし競いあい、そしてその結果に対して報酬を求めることさえもある。いわゆるプロフェッショナルスポーツであるが、これについてはいささか問題がある。

先のアトランタオリンピックでも問題になったものとしてドーピングがある。これなどはスポーツの本来の精神から逸脱した行為だとして大きな非難を浴びた。しかし、その行為の背景を考えると無理からぬことだとも考えられるのである。

現在、世間ではタレント主義で才能を非常に持てはやす傾向がある。商業主義の後押しもありプロフェッショナルスポーツの隆盛はとどまる事を知らない。では何が問題かというところの思想の前では人間は才能のみを評価されるということなのである。もっと言うならば、タレント主義の前では結果のみが求められ、それぞれの人間の努力は評価されないのである。そのため少しでも他人より上にいきたい、少しでも多く報酬を得たいとの呪縛に駆られ人間は薬物に手をだしてしまうのである。もちろん筆者はドーピングを容認するつもりなどまったくない。しかし、勝利することにより多額の報酬を得ることのできる現在のスポーツを取り巻く環境はそれを誘発するには十分すぎる要因をはらんでいる。これを改善しないかぎり同じような悲劇は繰り返されることとなろう。

スポーツの現状の立場では勝った、敗けたといった結果のみが問題とされそこに至るまでの過程はあまり重要視されていない。このことは現代社会の風潮と非常に類似している。有名校を卒業した人間のみが勝利者であり、それ以外は敗者であるという学歴至上主義の思想がそれである。この思想が蔓延した現代社会において教育をめぐる環境が危機的状況になっていることは厳然たる事実として受けとめなければならぬ。スポーツをめぐる環境もこれと全く同様である。勝つことが善であり、敗けることが悪であるという勝利至上主義の思想という病巣が横たわっているのである。

このような現状を鑑みるかぎり、スポーツのおかれている立場は非常に危ういものであると言わざるをえない。勝利のみに価値を置く勝利至上主義ではなく、少なくとも勝利にも敗戦にも価値を置き、それに至るまでの過程を重要視し、評価するというように世間の風潮が変わらないかぎり、スポーツの立場による人間形成は困難であると言えよう。

体育の立場

一方、筆者は体育とは身体運動を通しての教育であるという立場をとっている。その立場からいうと、教育者は被教育者に何を教え、被教育者は教育者より何を学ぶのかということが非常に重要な問題となってくる。ここでは教育者の側からみた場合、体育で何を教えるのかということについて考えていきたい。

高井薫は「教える」ということの典型的形態として命令、指導、教授、覚醒の四つを代表的な型としてあげている。⁽²⁾ そのなかで彼は命令とは行動を教えることであり、指導とは技術を教えることであり、教授とは情報を教えることであり、そして覚醒とは価値を教えることでありとそれぞれの形態における教育の対象と

なる事柄を示している。そしてまた彼は命令、指導、教授、覚醒の順で高次の教え方になっていくとこの四つの教え方の序列にまで言及している。⁽³⁾

では、これまでの体育はどのような教え方で、そして何を教えていたのであろうか。これについては、まさしく高井の言うところの「指導」という形態でこれまでの体育は行なわれてきたと指摘することができる。このことは第一章冒頭で示したように、課外体育における教育者が多くの場合「指導者」とよばれていることから明らかである。そして、教えてきた内容はといえばこれこそ運動技術であり、体力を増強させることであるといえる。ところで、技術の前提には目的がある。それゆえに技術は目的の実現にとっての方法であり手段であるということになる。では、体育の目的とはいったい何なのであろうか。体育が教育的行為であるという前提の下に考えていきたい。

前述したように、今日の勝利至上主義の風潮においては勝利こそがスポーツの目的であり、そして勝利を収めたいがために運動技術の習得を目指すのである。一方、人間が人間に対して行う教育的行為である体育の目的は「人を育てる」ことまさにそれである。自らが人間として成長するための一つの手段として運動技術を習得しようとしたり、体力を増強させようと努力することが体育の目的であって、運動技術の習得そのものが体育の目的では決してないのである。

しかし、これまでの体育では運動技術の習得こそが、あたかもその目的であるかのように考えられてきた感がある。⁽⁴⁾ そのため「人を育てる」という本来の目的がややもするとないがしろにされてきたかのような印象さえある。このような現状を打開し、体育本来の目的を達成するには何を為すべきなのだろうか。

体育が教育的行為である以上、教育者が被教

育者に「教える」ことによって彼らを「育てる」という行為に加わっていることは間違いない。しかしながら、教育者にできることは「教える」ことによって被教育者に自らの豊かな才能を自覚させてやり、彼らが自ら「育つ」手助けを行うことである。そのためにはこれまでの教え方では手助けできる範囲に限界が生ずる。

高井の言う「命令」「指導」「教授」という教え方が従前の教え方であり、その限界を突き破った「覚醒」という段階がこれからの体育に求められる教え方であろう。彼の言うところの「覚醒」とは人間の最も深部からの変化をもたらすものであり、この意味で人間自身が変わるとも彼は言っているのである。教育者の人格が被教育者の人格に働きかけることにより彼らの内的変化をもたらすのである。そして、そのことは教育者が被教育者に「教える」ことによって彼らが自ら「育つ」手助けを行うということに他ならない。

人格の人格への働きかけ、これこそが、今、最も体育に必要なのである。

次章では「覚醒」的教え方によって被教育者の人格に働きかけることに重点をおいて、特に大学生段階での課外体育の実践現場における技能習得過程における人間的成長につながる教育の具体例に言及してみたい。

第三章 技能習得過程における 人間的成長

人間は困難を克服したときに大きく成長する。そして、これを多く成功させた者が豊かな人間性を育むことができるのである。困難にぶつかるという機会を活かして、被教育者に自己の限界を克服していかせることが教育の重要な部分である。言い換えるならば、個々の持つ潜在能力を顕在化させて、その喜びを享受させることが教育者の大きな仕事なのである。産業社会の

変容により国民に経済的、時間的余裕が増え、生涯学習、生涯体育ということが言われて久しい。今後、ますます人間的成長の一助として体育の役割が重要となってくるであろう。

ここでは、課外体育の実践現場において学生がより豊かな人間性を育めるような環境をつくり、教育を行ううえで留意していかなければならないと思われる事柄について述べていきたい。

a 『了解知』⁽⁵⁾ でなくてはならない

学生が指導者の押しつけにより運動技術を身に付けさせられるのではなく、指導者と学生の相互の関係が発展していき、そのうえで運動技術を習得したときに自らの達成感や周囲の人に対する感謝の気持ちが生まれ、人間的成長につながるのである。そのためには押しつけの指導方法が不適切であることはいうまでもない。⁽⁶⁾

近年では暗記中心の偏差値教育の弊害であろうか、何故こうしなければならぬのかということを考えないばかりか、疑問すら持たない受け身の学生が増えつつある。

体育の実践現場においては入学試験のようにマニュアル化されたひとつの答えがあるのではなく、状況に応じた無数の答えがあり、被教育者の思考能力が大きく問われるのである。すなわち、ひとつひとつの事柄について被教育者に対して彼らがどこにどのようにつまずいているのか、彼らがどのような助言を求めているのかということを理解したうえで説明を加え、彼らの反応を確かめながら教育を行う。そして彼らに事柄の本質をつかませて、納得させる。そのためには豊かで科学的な指導内容、指導方法を準備しなくてはならないことは言うまでもないが、それだけでなく豊かな人間性を指導者が育んでいなくてはならない。

b 依存心ではなく向上心を持たせること 他者の力によって上達させてもらおうと思う

人間ではなく、自ら上達しようとする人間を作り出すように心がけ、教育を行わなければならない。そのためには現在の学生たちに蔓延している他人に依存するという風潮を一掃し、自ら考え、創造することの喜びを体験させていかねばならない。そのうえで、その際生ずる多くの事柄はすべて学生個人の責任であり、彼ら自身にはね返ってくるものであるという当然のことを深く認識させなければならない。そのためには学生のモチベーションを高めていかねばならないのであるが、学生個々の初期のモチベーションにはかなりの差異が認められるため、多くの学生を指導する際には指導者と学生、そして学生同志の対話によってやる気を喚起させることが重要となってくる。指導者が目標を提示するのではなく、対話によって集団の目的を作り上げていき、その目標に到達するための個人目標を創出させていくことが肝要である。

そして指導者は、全体練習以外の自主練習、休日等の練習等にも目を配り、隠れた努力を評価するように心を砕かねばならない。

学生個々の運動能力に優劣があることは言うまでもない。一般に人が課外体育指導者を志す際にはほとんどの場合そのスポーツ種目への関心が動機となっており、それを媒介としての教育にはあまり関心を持たない場合が多い。そのため指導者は運動能力の劣った学生を感知する能力に欠けており、その学生が何故その種目を嫌がるかということを理解できない（理解しない）ケースが多々生ずるのである。

学生たちのモチベーションを持続していくためには能力の劣ったものに対しても、不断の努力を評価し、助言を与えることが教育者と彼らの関係を深めるうえで重要であり、ひいてはそのことが彼らの人間的成長につながっていくものである。

c 指導者・学生は互いに一度出した結論に固執するべきではない

体育のみならず指導者というものの多くは、その分野において卓越した技術、知識を持っているであろう。そして、彼らはその分野に関して、自らの経験に裏付けられた堅固な自我を持っているはずである。指導者にとって確立された自我が必要であることは言うまでもないが、時として指導者は指導内容、指導方法に関して独善的なフォーマットを形成しがちであり、結果として自らの作り上げたフォーマットを逸脱するような独創的なフォーム、プレーを頭から否定してしまいがちである。オリックス・ブルーウェーブのかつて監督であった土井正三氏がイチロー選手の『振り子打法』を頑迷なまでに否定し、彼の才能を結果的に見出すことができなかつたという話はあまりにも有名である。

これは被教育者たる学生にも同じことが言えよう。ある程度満足いく結果が出ると、その結果や過程を普遍的真理であるがごとく崇拜してしまうのである。

体育においては、それ自体が人間の作り上げたままだまだ歴史の浅い文化であるため、自然科学のように法則が存在するのではない。すなわち、指導者そして学生は特定の考え方にとらわれることなく、相互に教え、教えられるという関係を通じて柔軟な発想を持ち、冒険することも必要であろう。そうすることによって結果的に成功したときはもちろん、失敗した場合でもそれまでの殻を打ち破り新しいことに挑戦したということが指導者、学生双方にとっての人間の成長につながっていくことは言うまでもない。

d フェアプレーの倫理観を育てなければならない

人間が真に身体運動の喜びを得るためには、他者と自己が同じ条件のもとに競いあうという状態が必要である。ドーピングによって肉体を

強化したり、反則まがいのラフプレーを行うことによる勝利は、無価値な行為であるということ深く認識させることが必要である。人間は自己の向上のため、目の前に横たわる障害を乗り越えなければならないが、それが大きければ大きいほど、『自分はこれだけ苦しい思いをしているのだから絶対に他人には負けたくない。』と考え、周囲の誰よりも上達したいと考えることは至極当然であろう。その思いがかなえられるかどうか、あるいはかなえられないのではないかという不安から、ともすれば自己中心的な行動に走るということも十分に考えられる。

不法行為を思いとどまらせるという倫理感の育成は、本来、幼い頃からの家庭や地域社会によるしつけに大きく依存されるべきものであるが、今日のように他者が何をなさうが無関心という個人主義の風潮が蔓延する社会ではそれを望むことは困難である。すなわち、現代の日本社会においては、体育の倫理感の育成に果たす役割が高まっていくのである。

e 敗北は無価値ではない

人間が他者を何事においても上回りたいと考えることは本能的なものである。そしてそれは自分の愛好する身体運動活動においても例外ではない。ここでもし、勝利至上主義の思想の呪縛にとらわれた指導者によって、敗北は無価値の絶対悪であり、勝利のみが何物にも替え難い価値のあることであると指導されているならば、価値のある人間は、チャンピオンとなることのできた唯一の集団、あるいは個人のみであるということになってしまう。

自明のことではあるが、勝利者よりも敗者の方が多数であり、その多数の敗者たちにとってはそれまでの努力が意味をなさなくなる。そして大学を卒業したとき、彼らにとって課外体育活動は最悪の思い出として心に残っていくのだら

う。社会人になって経済的、時間的余裕を持ちながら身体運動活動から疎遠になってしまう者が多いという現状がある。これは学生時代に作られた体育に対する悪印象（マイナスイメージ）が遠因となっているのである。

勝利をめざしながらも敗北にも価値があるという二律背反の価値観を学生にうえつけることは困難な作業であることは間違いない。だが、結果ではなくそこに行き着くまでの努力を評価することこそが、自由で豊かな体育の発展のためにはきわめて重要なことであろう。

まとめ

ここ数年のマルチメディアの発達、普及は目を見張るべきものがある。近い将来、学問においても人間と人間のふれあいを通して学びあうことがなくなり、コンピューターから即座に最新情報、知識を取り出す方向に向かっていくことが考えられる。これは一見したところ、非常に便利なことであるかのように考えられるが、いわゆる『人間疎外』の未来も大いに危惧されるところである。加えて、子どもの頃から受験勉強で、決められた範囲を正確に記憶することを第一目標として勉強させられたことによる自主性、創造性の喪失も問題視されている。このような現実を直視したとき、体育の存在意識が自然と浮かび上がってこよう。

もう一度「知育・徳育・体育」という言い回しを思い出してもらいたい。この三本柱においてひとつだけが突出して比重をおかれることなく、それぞれがお互いに連関して作用するとき、被教育者の人間的成長が促されることは自明の理である。だが、現実の社会においてはどうか。三本柱のうちで知育だけが突出して比重をおかれている現実が歴然として横たわっている。現実のところ、体育は社会的に見た場合、あまり重要視されていないような印象を受

けてしまう。しかし、体育は人間と人間の接触により豊かな個性を育むという面において教育の最後の砦となりえる存在である。体育に従事する者たち（体育教員、課外体育の指導者を問わず）はその責任を自覚し、研究、教育に当たっていかねばならないであろう。

本研究のしめくりとして以下のことばを引用したい。

「凡庸な教師はただしゃべる。よい教師は説明する。すぐれた教師は自らやってみせる。そして偉大な教師は心に火を点ける。」（ウィリアム・アーサー・ワード）

心に火を点けるような教育を行う。このことについての絶対の方法論は存在しない。だが、このことが被教育者の人間的成長を促すうえできわめて重要なのである。この遠大なテーマを解決するに最も近い場所に体育は位置していよう、体育の可能性はそこにある。

注

- (1) 斎藤喜博著「斎藤喜博全集」－1970年 国土社 P351
- (2) 高井薫著「『教える』ことと『育てる』こと」－教育の基礎論的考察－1988年行路社
- (3) 高井は命令、指導、教授、覚醒の順でより高次の教え方となっていくとしている。しかし、筆者の考えを述べるならば、教育者が被教育者と同じ目線で、そして被教育者の人格に働きかける覚醒こそが高次の教え方であると考えます。
- (4) 「今日の急激な社会変化ともなって、スポーツの生活文化としての価値が高まってきたところから、生涯スポーツにつなぐ体育のあり方が求められている。わが国の『楽しい体育』論のもとでは、運動を手段とするだけでなく、運動の内在的価値を評価し、運動を目的・内容として学習することが意義付けられている。このような立場は『運動の教育』として概念化される。」
（松田岩男編「学校体育用語辞典」1988年 大修館書店P214「体育科教育」の項より抜粋）このように運動そのものを学ぶことが最近の体育の目標となってきた。
- (5) 堀尾輝久著「教育入門」1989年 岩波書店P157
「ことがらの本質をつかみ、心に落ちた、納得できたというわかり方は、これまでの既存の知識の関係と組み変えていく力を持ち、新しい問いを含み、新しい認識の発展の芽をはらませているのです。そこには納得できたよろこびとともに、つぎの探求をうながす内的な力を湧きださせる何ものがあるのです。このようなわかり方による知を、了解知と呼んでおきましょう。」と堀尾なりの了解知ということばの定義づけをしている。本研究ではこの意を用いた。
- (6) この場合、「指導」とは高井の言うように技術を教えるということに限定して考えるのではなく、一般的概念として理解されている「教えみちびくこと」（広辞苑）として考える。